

## 济州島(チェジュド)の世界遺産をめぐる旅

8月17日(火)から2学期が始まりました。しかし……、全学部オンライン授業でのスタートです。この日は、あらかじめ録画していた始業式の様子を各学年のIDを使ってzoomで配信。子どもたちは、各家庭のコンピュータ画面の前で始業式に出席しました。服装は式服で、久しぶりのきちんとした会でしたが、姿勢も良くミュートのままで、大きな声で校歌を歌ったり、友だちの2学期の発表を聞いたり、校長先生の話の話を聞いたりしていました。

この週は、すべての学部学年がオンラインで授業を実施。8月23日(月)からは幼稚部と1,2年生は登園、登校、中学部は1,2,3年生が1学年ずつ順番に登校となりました。ソウル教育庁からの指導で、毎日2000人前後のコロナ感染者が出ていて、注意レベルも一番高い4ですが、9月6日からはすべての学部、学年が登校することになりました。

夏休みは2週間とちょっとと短かったのですが、派遣教員は、海外に行けない分、感染予防に細心の注意をはらいながら、それぞれ韓国国内を旅していました。わたしは、韓半島の南に浮かぶチェジュ島の世界遺産を訪ねました。



(济州島はこんな形です)

チェジュ島は韓半島の南に浮かぶ火山島で、人口約65万人、面積は約1800km<sup>2</sup>。日本で一番小さな香川県とほぼ同じ大きさで、人口は、新潟市より12万人ほど少ないという島です。ここには世界自然遺産が3つあります。行く前の資料には3つだったのですが、行ってみると正確にはそこから派生する8つの対象地域がありました。

火山島なので、岩が多く滝もたくさんあります。島のほぼ中央に韓国で一番高い山、1950mの漢拏山(ハルラサン)があります。この山を中心に、オルムと呼ばれる側火山が360ほどあり、これにより島の景観を創り出しています。ハルラ山そのものが世界遺産として2007年に登録され、そこから流れ出た溶岩による洞窟やオルムも世界自然遺産に指定されているところがあります。



(海に直接落ちる滝)



(島の至る所に柱状節理)



(山から流れる川にも滝)



## ○万丈窟(マンジャングル)

ハルラサンの火山活動で形成された溶岩洞窟です。溶岩洞窟は5つが世界自然遺産になっていますが、そのうち4つは未公開で、マンジャングルだけが公開されており見学をしてきました。

全長7.4kmのうち、約1kmが整備されていて公開されています。中は天然のクーラーが効いており、この日の気温は34℃以上。でも中は長袖が必要なほど寒かったです。中はライトアップされ、左右の岩肌には、溶岩が通ったあとがくっきりと残っており、地層のようになっていました。片道1km、往復で2km約1時間の見学でした。



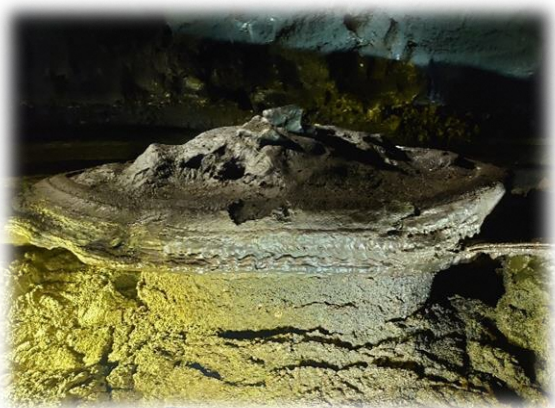
(入口はすでに冷気が漂っています)



(両壁に溶岩が流れたあとが…)



(上層から流れ出た溶岩の重なり)



(濟州島の形をした「亀岩」)

## ○城山日出峰(ソンサンイルチュルボン)

濟州島の最東端に突き出るように、海から地上に現れたオルム。2011年と2012年2年連続で、アメリカのCNNが選定した韓国秘境1位になっています。海拔180mの頂上まで、30分ほどで登れます。頂上には、くぼんだ火口がはっきりとわかり、海底火山の噴火口ということが実感できます。







(まずは麓まで緩やかな石段が続きます)



(頂上は噴火口のあとが！緑いっぱい！)



(下山途中 右手に今注目の牛島「ウド」が)



(海から噴火した様子が見て取れます)

### ○漢拏山(ハルラサン)



韓国の最高峰ハルラサンは標高1950m。この火山の噴火によって、済州島は形成されました。漢拏山(ハルラサン)は、1950mと大変高い山なので、頂上はいつも雲に覆われ、見ることがなかなかできないとのこと。私の滞在中も、唯一飛行機で着陸する時にかすかに見えたものの、その後は一度も顔を出しませんでした。

一帯は国立公園にも指定されており、登山道も整備されています。登山をする場合は日帰り(泊りは許されていません)が原則で、しっかりとした計画と、ガイドさん同行が欠かせません。春夏秋冬どの季節も美しく、その季節の花が咲きます。秋の紅葉、冬の雪景色も素晴らしいようです。(上の写真は無料サイトからいただきました)



## ○アルトゥル飛行場

濟州島の南西、島の先端、黄海に突き出た場所に、旧日本軍の戦跡がありました。アルトゥル飛行場です。今は、空港があったとは思えないほどのどかな畑が続いていました。ただその中に、濟州島ならではの、オルムまでは言えない岩石の丘がたくさんあり、その中をくり抜いて、飛行機の格納庫にしたり、防空壕にしたりしていたようです。世界地図で確認すると、ここから中国上海まで約500キロ。畑のど真ん中、岩の中に、当時の戦闘機のレプリカ？が置いてありました。近くには日本語の案内板（下写真）があり、700km離れた南京を爆撃するため、この飛行場から出撃したと書かれていました。

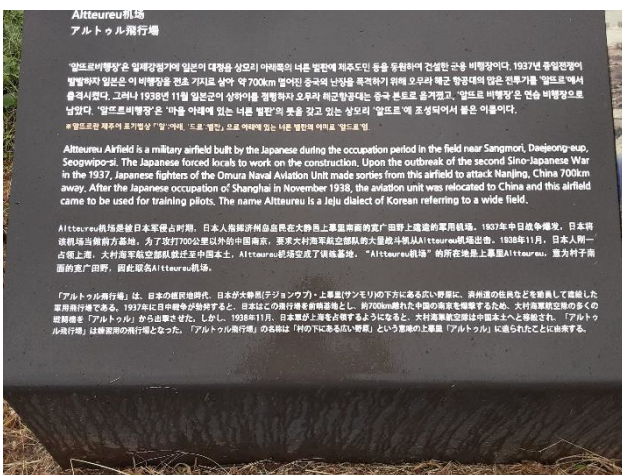
タクシードライバー兼日本語ガイドの金さんが、「めずらしいね。日本人でこんなところ行ってくれなんて言う人。何も言わなければ、日韓関係も考え、日本人をこんなところに案内しないよ！」と言っていました。



（畑の向こうまで飛行場 奥に山房山）



（溶岩を利用した格納庫とレプリカ？）



（旧日本軍の様子を伝える案内板）



（漫画でも当時の様子を伝えていました）

「アルトゥル飛行場」は、日本の植民地時代、日本が大静邑(テジョンウプ)・上幕里(サンモリ)の下方にある広い野原に、濟州道の住民などを動員して建設した軍用飛行場である。1937年に日中戦争が勃発すると、日本はこの飛行場を前哨基地とし、約700km離れた中国の南京を爆撃するため、大村海軍航空隊の多くの戦闘機を「アルトゥル」から出撃させた。しかし、1938年11月、日本軍が上海を占領するようになると、大村海軍航空隊は中国本土へと移設され、「アルトゥル飛行場」は練習用の飛行場となった。「アルトゥル飛行場」の名称は「村の下にある広い野原」という意味の上幕里「アルトゥル」に造られたことに由来する。

（上の案内板の日本語の部分だけ拡大しました。見えますかね？）